

どんなことでも、神にはできる

マルコの福音書 10章 17-22節

はじめに

今日は、イエス様とあるひとりの人との出会いの出来事から学びたいと思います。

1. ひとりの人

この人は、イエス様が道を歩いている時に、突然走り寄って来て、ひざまずいてこう言ったのです。「**尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいでしょうか。**」

この人は、永遠のいのちを求めて、イエス様のもとに来ました。しかも走り寄って来て、ひざまずいたとありますから、かなり切実に求めていたようです。

永遠のいのちとは何でしょうか？永遠のいのちとは、老いることも死ぬこともない不老不死のいのちのことではありません。そうではなくて、簡単に言えば、天国に入ることです。

私たちは誰でも、いつか死ななければなりません。私たちは死んだ後、どうなるのでしょうか？聖書は、私たちが死んだ後、私たちの魂が行く場所は二つしかないと教えています。それは、神様がおられる天国か、それとも神様から捨てられる地獄か、です。

永遠のいのちとは、私たちが愛してくださる神様と永遠に共にいることです。死んだ後も、あらゆる労苦から解放されて、天国で神様の愛の中にいることです。

この人は、このような永遠のいのちを求めていたのです。しかもかなり切実にです。

なぜ彼は、永遠のいのちを求めていたのでしょうか？彼は、一般的に見て、人生の成功者でした。22節を見ると、彼は「**多くの財産**」を持っていました。

他の聖書箇所を見ると、彼は「**役人**」(ルカ 18:18)であったとあります。この言葉は、「支配者」「指導者」「議員」「会堂管理者」と訳される言葉です。とにかく彼は、「人の上に立つ」人だったので、今で言えば、政治家や会社の社長、大学教授のような人であったでしょう。

彼は何歳ぐらいの人だったのでしょうか？他の聖書箇所を見ると、彼は「**青年**」(マタイ 19:20)であったとあります。おそらくまだ20代から30代であったのでしょう。彼は若くして仕事も成功し、地位と名誉と多くの財産を手に入れた人だったので、

彼は、倫理・道徳的にもしっかりした人でした。彼は聖書の教えをよく知っていて、神様の律法を小さい時からよく守っている人でした。

彼が結婚していたかは分かりません。しかし彼は一般的に見て、人生の成功者です。地位や名誉もある、多くの財産もある、倫理・道徳的にも真面目で、若いのでまだ健康もあり、未来もある、人が羨むような人生でした。周りから見れば、欲しいものはすべてある、足りないものなど何もない、そんな人生でした。

しかし彼は、永遠のいのちを切実に求めていたのです。なぜ彼は永遠のいのちを求めていたのでしょうか？おそらく彼は、死を恐れていたのではないのでしょうか？人生は成功した、地位や名誉や財産もある、しかし死んだらどうなるのか？死んだら自分の財産はどうなるのか？地位や名誉も忘れられてしまうのではないのか？悪いこともせず真面目に生きてきたけれど、本当に天国に行けるのだろうか？

彼は人生に成功しました、しかし必ずいつかは来る死という現実の前に、彼の地位や名誉や財産は何の役にも立たなかったのです。彼の倫理・道徳的に正しい生き方さえ、死の問題に対する平安を与えてくれなかったのです。

彼は、死の問題を解決するためにイエス様のもとに来ました。イエス様の説教を聞いて、イエス様が病人を癒す姿を見て、イエス様こそ神の子だ、イエス様なら永遠のいのちへの道を知っているはずだ、イエス様なら死の恐れを解決してくれるはずだ、そう思ってイエス様のもとに来たのでしょうか。

2. 永遠のいのちを得るには？

ではイエス様は、永遠のいのちを切実に求めている彼に、何と言われるのでしょうか？イエス様はこう言われました。「**あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい**」。

イエス様は彼に二つのことを命じています。一つは、自分の持ち物を全部売り払って、貧しい人たちに施しなさいということ、もう一つは、わたしについて来なさいということです。

ここで私たちには疑問が浮かびます。永遠のいのちを手に入れるためには、天国に行くためには、自分の持ち物を全部売り払わなければならないのでしょうか？自分の財産をすべて、貧しい人のために使わなければならないのでしょうか？そうしなければ、永遠のいのちを手に入れることも、天国に行くこともできないのでしょうか？もしそうだとしたら、ここにいる人たちの中で、どれだけの人が天国に行けるのでしょうか？私たちは、イエス様を信じるだけで永遠のいのちを与えられる、救われて天国に行けると聞いて洗礼を受けてクリスチャンになった、イエス様を信じるだけでは天国に行けないのでしょうか？

イエス様はここで、永遠のいのちを手に入れる条件、天国に行く条件を二つ語っているではありません。永遠のいのちを手に入れる条件、天国に行く条件は、ただ一つしかありません。それは、イエス様について行くことです。

当時、イエス様は各地を旅していました。ですから、イエス様について行くことは同時に、自分の家を離れ、自分の家族と離れることを意味していました。イエス様について行くということは、文字通りすべてを手放すということの意味していました。そしてイエス様だけを信頼していくということの意味していました。

イエス様は彼にそのことを教えようとされたのです。永遠のいのちを手に入れるには、天国に行くには、イエス様だけを信頼することが大切なのです。

私たちは、自分が死を迎える時、すべてを遺していかなければなりません。財産も、愛する家族も、地位や名誉も、経歴も学歴も業績も、すべてを遺していかなければなりません。それらは、自分が死を迎える時、何の役にも立ちません。永遠のいのちに対して、天国に行けるかどうかに対して、何の役にも立ちません。

自分が死を迎える時に、最終的に問われることは、イエス様について行くかどうか、イエス様だけを信頼するかということだけです。どれだけ財産を蓄えたとか、どれだけ家族に恵まれたかと、どれだけ仕事に成功したとか、どれだけ慈善活動をしたとか、どれだけ教会で奉仕をしたとか、どれだけ人を救いに導いたとか、どれだけ真面目に生きてきたとか、そういうことではなく、ただイエス様について行くか、イエス様だけを信頼するかということだけが問われるのです。

私は最近、高校時代からの親友を突然亡くしました。彼はまだ41歳でした。突然の事故死でした。文字通り彼は、すべてを遺していきました。仕事も、家族も、お金も、家も、私たち親友のことも遺して行きました。彼の葬儀に出席した時、まさに彼は体一つで棺に入っていました。私は思いました。死を迎える時は、一人なのだと。そして体一つなのだと。そして死を迎える時に問われることは一つなのだと。それは、イエス様について行くかどうか、ということです。愛する者を亡くした時、遺された家族や友人にとって最も慰めになることは、その人が天国に行ったという確信です。それ以外にはないのではないのでしょうか？その人は、イエス様について行って天国に行った、それこそ私たちにとって最大の慰めです。

おわりに

私たちが永遠のいのちを手に入れる道、天国に行く道、それはただ一つしかありません。それは、イエス様だけに信頼し、イエス様について行くということです。

イエス様とは、どんな方でしょうか？イエス様は神の子です。イエス様は神であられる

のに、神としてのあり方を捨てて、人となりました。そして、私たちに永遠のいのちを与えるため、天国に導くため、私たちの罪の罰を身代わりに受けられました。それが、あの十字架の死です。イエス様は、私たちのために命まで捨てられました。

イエス様は、私たちのために神としてのあり方を捨てられ、ご自身の命まで捨てられました。そのイエス様の前に私たちが問われていることは、「わたしについて来なさい」「わたしだけに信頼しなさい」ということです。永遠のいのちを前に、天国を前に、私たちの財産や家族や仕事や良い行ないは一切役に立ちません。イエス様について行くかどうか、イエス様だけに信頼するかどうか、です。

私たちは文字通り、全財産を売り払って、貧しい人に施す必要はないかもしれません。しかし、私たちは毎週の礼拝で、イエス様への献身が問われているのです。毎週の礼拝で、私たちは献金を献げます。なぜ献金を献げるのでしょうか？教会の運営を助けるためでしょうか？もちろん、それもあつたでしょう。しかし、私たちは毎週の礼拝の献金の時に、イエス様への献身を問われているのです。献金を献げることを通して、「私は財産に信頼しません、イエス様あなたに信頼して今週も生きていきます」という信仰を告白するのです。財産だけではありません。私たちは献金の時に、すべてを神様に献げるのです。「私たちのお金も家族も仕事もすべて神様に与えられたものです。私たちは神様に与えられたものに信頼しません。あなた御自身に信頼していきます」。そのような信仰を新たにするのが、礼拝の献金の意味です。私たちは、毎週の礼拝の献金の時に、今日の聖書箇所に出てくる金持ちの青年と一緒に立場に立たされ、「わたしについて来なさい」とイエス様に招かれているのです。

イエス様は、金持ちの青年を「**いつくしんで**」「わたしについて来なさい」と言われました。この「いつくしんで」という言葉は、ギリシア語のアガペーという言葉で、無条件の愛を意味します。イエス様は、彼を愛していました。決して意地悪で財産をすべて売り払いなさいと言ったわけではありません。イエス様は彼に、永遠のいのちにとって、人生にとって何が一番大切かを教えようとされたのです。イエス様について行く道こそ、死を超える確かな希望と慰めを与える道であることを教えようとされたのです。

イエス様は私たちをも愛しておられます。私たちを愛して、「わたしについて来なさい」と招いておられるのです。